

心的傾向としての植民地主義

—植民地主義をめぐる基礎的考察 I—

池田 緑*

要 旨

これまで植民地主義は主に政治制度と歴史性に結び付けて論じられてきた。しかしそのような認識枠組みでは、制度としては消滅しても実効的に存続する植民地主義を問題化できない。また、この社会に遍在する植民地主義的な支配関係も捉えることができない。本稿では、植民地主義を制度や歴史性の問題ではなく、心的傾向の問題として再定義したい。それによって、社会に遍在する支配関係において、植民地主義の痕跡を発見することが可能になり、さらにはコロニアリストの心性の問題としてその責任を問題化することが可能になる。さらに本稿では、国民国家システムにおけるフォーディズム体制が社会の分業化を促し、被抑圧者を創設し、やがて本質主義によって正当化してきたことを整理する。その過程では、コロニアリストによる支配に際しての共通の手法が発見できる。支配関係を指し示す言説の欠落、区別論、被支配者への問題の転嫁、被支配者への介入と分断、被支配者の多様性の賞賛、自己欺瞞の強要、などである。これらの手法を注意深く見ることによって、制度化された支配の中に植民地主義の痕跡を発見し、「心の支配」の問題に転換して捉え直すための視点を模索する。

はじめに

この社会のいたるところに植民地主義は存在している。それはどのようなもので、どのような思想が支えているのだろうか。本稿では植民地主義を制度的な問題としてではなく心的傾向の問題として捉えなおしたい。また植民地主義は他者の資源化でもある。そして、他者を資源化する手法はそれほど多様なものではない。そのような手法は、多くの場合、心の問題と結びついてたち現われている。そのような手法に注目することによ

り、さまざまな関係に潜む植民地主義をあぶり出すことはできないだろうか。本稿では、以上のような問題関心にしたがって、「心的傾向としての植民地主義」とその実践手法について基礎的考察を行いたい。

1. 植民地主義と現在

われわれ日本人の多くは、“植民地”という言葉や中を中学や高校で歴史（社会）の時間に学習してきた。遠いアフリカやパレスティナ、あるいは海

*社会情報学部

を越えたインドや中国で、かつてヨーロッパ人によって実践され、やがては日本人もその一翼を担った、と学ぶ。それは、高度経済成長期以降に生まれた者にとっては、遠い場所の過去の歴史であり、たとえば“絶対主義”や“律令体制”といった用語と同様に抽象的でリアリティのない歴史的概念として共有される。多くの日本人にとって植民地とは、われわれの日常生活と時間的にも空間的にも遠く隔たった概念だ。それは、かつて、ここではないどこかで、われわれとは世代的にも意識的にも断絶した人々によってなされたものと考えている。

もちろん、日本という国民国家がかつて植民地を統治し、植民地支配を実践してきたことは学校で習う。しかし学校教育においては、日本は1945年8月15日をもって変わったのであり、それまでの天皇を頂点とした軍事独裁国家とは断絶した民主的な国民国家として生まれ変わったという、現代への基本的な認識が存在しているように思われる。このように日本が1945年に変革したという認識は、統治システムを時代区分の主要指標としている歴史学と、歴史学者が主導的に参与して作成される教科書においては自明な前提とみなされている印象を受ける。かつて憲法学者宮沢俊義が唱えた「八月革命説」等に典型的にみられるように、天皇主権国家から国民主権国家への統治システムの変貌¹。かくして、日本の植民地主義は“過去”として教えられる。かつて植民地支配を行った日本と現在の日本は別のものであり、社会思想の系譜においても、政治制度においても断絶がある、すなわち終戦で日本は変わったのだ、というわけである。

ところで、公教育において社会思想的・政治制度的に戦前・戦中期との断絶が強調される一方で、ヒロシマ・長崎への原爆投下、あるいは東京大空襲における被災者の悲惨な体験は、現在の日本人との連続性をもって示され、学校でも教えられる。社会思想・政治制度の断絶と人的・被害における連続性。筆者は決してこれらの事象の一つ一つの正当性を疑っているわけではない。たしかに終戦を境に日本の主権者は法的に交代した。ま

た少なくとも日本という国民国家全体として、軍事を中心とした国家形態を選択するというコンセンサスが形成されているわけでもない。同様に、未だに後遺症やガン発症の恐怖におびえる被爆者も多く存在しているし、戦災によって家族や親しい人を失った傷を回復できぬままに戦後を、そして現在を生きている人も少なくない。たしかに、思想や制度として戦前と現在は別の社会であり、その一方で戦争による傷を抱えたまま生きる人も存在している。

だが、この二つの相反する事象を前に素朴な疑問が浮かぶ。社会思想や政治と、同時期に歴史を経験し、そこにかかわった“人びと”は、連続性において、峻別が可能なのだろうか。“人びと”が連続している以上、思想や制度は本当に断絶したのだろうか。政治・思想と“人びと”は、はたして厳密に分離可能なものだろうか。

戦争による被害を抱えている人が存在する。その人にとっては、戦争は終わっていない。終わらせたいと願っても終わらせることができないのだ。そして被害の継続があるということは、加害の継続の可能性も同様に存在するはずである。この加害の継続も終わらせることができないのだ。そして、被害／加害という政治の場が継続しているということは、それをとりまく社会思想も—その内容はともかく—少なくとも社会思想を形成する場としては継続していることを意味する。いうまでもなく“従軍慰安婦問題”や“靖国問題”はその突出したアーリーナの一つである。そのような場では、人が（世代が）交代し、また論点が転換したとしても、かつて加害—被害の関係性を取り巻いていたポリティックスは、形を変えて現存している。

この種のポリティックスへの注目には、日本人および日本社会にとって大きな苦痛を伴う。それは我々の存在自体の自明性を揺さぶる、存在にかんする根源的な問いを誘発するからだ。

たとえば沖縄。太平洋戦争において唯一地上戦が行われた。“鉄の暴風”と表現される米軍による過酷な掃討作戦。日本軍による住民虐殺や強制された集団自決。それらによって住民の4人に1

人が亡くなったといわれる。しかも沖縄戦は日本軍にとって“本土決戦”への“時間稼ぎ”として位置づけられ、いわば沖縄人は“捨て石”とされたという歴史がある。そして結果として、“時間稼ぎ”の目的である“本土決戦”は行われることなく、地上戦は沖縄でのみ行われ、沖縄以外の日本では米軍による掃討や住民虐殺、集団自決はほとんど存在せず、4人に1人が死ぬこともなかった。さらに“戦後”期は米軍による27年におよぶ軍政統治。沖縄は軍事要塞化し極東における米軍戦略の拠点となり、米軍人による犯罪などの基地被害や経済発展の阻害も顕著で、沖縄人の人権は無視され続けてきた。その一方で日米安保条約によって軍事負担を逃れた日本は、安全が保障された環境下で経済発展を遂げることができた。

たしかに広島や長崎においても原爆という悲惨な体験があった。あるいは東京大空襲のような都市部の戦災も悲惨なものであった。だが、それらの土地が軍事都市（広島）や軍需産業の集中（長崎）といった日本の国策と直結した場所であったことと、原爆投下や大規模空襲の候補地として選定されたこととは無関係ではない。一方で、沖縄にはそのような軍需産業は存在しなかったし、日本軍が“時間稼ぎ”のために徹底抗戦を実行しなければ、沖縄戦においてみられたような悲惨な状況が現出したかどうかは疑わしい。

一方では以下のような見解もあるかもしれない。すなわち、沖縄は米軍の本土上陸の拠点として日米双方にとっての橋頭堡であり、軍事的戦略価値が高いため、沖縄における過酷な戦闘は国民国家が戦争を行う際に戦略として必然だったのだ。それは広島や長崎が担っていた戦略的位置と同等に、日米双方にとって重要な軍事的拠点であり、国民国家間における戦争の論理、さらには一善悪の評価は別として一国民国家が国民に課す非情な要請として、沖縄戦は広島や長崎と同じように国民国家体制の帰結的な犠牲だったのだ。たしかに沖縄戦は悲惨であったが、その犠牲は国民国家の論理にしたがって発生したもので、戦争と全体主義的軍事国家のシステムが悪いのであり、広島や長崎の犠牲者と等しくファシズムの犠牲者な

のだ、と。

しかしながら、このように沖縄戦と原爆とを等閑視する見解は説得力を欠く。なぜなら、沖縄人は日本人扱いされてこなかった歴史があるからである。本土において“沖縄人お断り”のような露骨な差別があったことはよく知られているし、くしゃみすらも他府県人の真似をせよ²とまで、沖縄人自身に言わしめた琉球処分以降の苛烈な同化政策は植民地支配の一つの典型である。そして沖縄戦において“捨て石”とされたこと、戦後は沖縄人の危険の上に安全と経済発展を享受してきたこと、さらに1972年の日本“復帰”後も在日米軍基地の75%が集中し、基地被害も一向に改善されなかったことなど、“非日本人”としての扱いは一貫している。長期間にわたる執拗な日本人からの区分と不平等。このような状態を、一般には差別というのだ。広島・長崎の犠牲者と沖縄戦の犠牲者は歴史的な文脈が異なっている。国民国家の構成員の犠牲として等しく語ることはできないのだ。

もっとも、このようなことを書いたからといって、筆者は戦争による死者を序列化する意図をもっているのではない。たとえば、広島・長崎はそこが軍事都市であったり軍需産業が存在し、原爆の犠牲者は国民国家の一員としての死であり、一方で事実上被支配地域であった沖縄人の死は“まきぞえ的”な犠牲である、と。このような見解は歴史的なポジションナリティ（政治的位置性）を考慮すれば成り立つ余地はあるかもしれないし、別の議論としては考察に値するだろう³。しかしここで問題にしたいのは、それ以前の問題である。

そもそも、戦争犠牲者には等しく尊厳など与えられてこなかったのである。これは他稿においても紹介したことであるが、作家の佐木隆三は「広島では原爆の慰霊碑に「過ちはふたたびくりかえしませんから」と刻まれている。だが沖縄では、どの慰霊碑にもその文字は見られない」と指摘している（佐木、1982：15）⁴。この違いは、広島や長崎の死者は繰り返してはならない“過ち”の犠牲者であるのに対して、沖縄戦における死は、

少なくとも“過ち”の結果ではない、ということの意味している。沖縄に存在する慰霊碑が、各都道府県単位で戦没者を慰霊するというシステム（各県出身の戦没者を慰霊の対象とし、そもそも沖縄人戦没者などを慰霊することを企図していない）となっていることを差し引いて考慮しても、そこにおいて示されているのは、日本人の認識は沖縄戦を“過ち”としては捉えていないこと、沖縄人の死が“沖縄人を含む日本人”全体での体験として共有されていないこと、沖縄戦を繰り返さないという決意も表明されていないということである。沖縄人の4人に1人が死んでも、それは“過ち”ではなかったのだ。言い換えれば、将来において再度沖縄戦がocこり、ふたたび沖縄人が殺されるという未然の可能性はゼロではない。

戦争犠牲者は、すでに序列化されていたのである。繰り返してはならない“過ち”による犠牲者と、日本という国民国家の“正当”な行為における必然的な犠牲者として。人の生命の重みと平等性を説く教育を戦後世代は受けてきた。しかし戦後日本社会そのものが、少なくとも法的には“同じ日本人”とされていたはずの沖縄人の死を、その重みにおいて切り分けてきたのである。

本稿のような見解には異論が唱えられるかもしれない。すなわち、広島・長崎の犠牲者は日本人を含めた人類全体の“過ち”の犠牲者であり、核の時代という人類史的に新たな段階の最初の犠牲者であったために、他の戦争犠牲者とは区分されている。つまり原爆の犠牲者は人類全体の愚行の犠牲者であり、他の戦争犠牲者とはその意味が異なるために区分されていて、それ以外の“通常”の戦争犠牲者には日本人も沖縄人も区別はない。といった異論である。筆者にも原爆の犠牲者が象徴する人類史的な意味は理解できる。しかしながら、原爆の犠牲者がその後の人類史において象徴的な意味をもつことと、原爆犠牲者以外の日本人戦争犠牲者と沖縄戦犠牲者が等しく扱われているか否かは直接には関係しない。

あらかじめ、このような死者の意味づけにおける軽重を問題にする枠組み自体に正当性がないことを確認した上で、あえて、この論点にかんして

は、原爆犠牲者と“ひめゆり”を考えてみるとよい。原爆と“ひめゆり”には似た点がある。それは共に戦争の被害者（とくに民間人被害）の象徴として、繰り返し語られてきたことである。それは同時に、日本本土の戦争被害がほとんど空爆によるものであったことの象徴と、沖縄戦の被害がほとんど地上戦によるものであったことの象徴という差異も表している。原爆の犠牲者は、日本国外における位置づけとは異なり、まずは“戦争の犠牲者”として位置づけられてきた。それは原子爆弾による死者と他の焼夷弾空爆による死者との象徴としての統合でもあった。それはある意味で当然である。原子爆弾による死も焼夷弾による死も、空爆によって近親者を失った人々にとっては共に埋めがたい悲しみである。空爆被害の象徴としての原爆に、空爆によって殺されたすべての民間人の死が統合されていった過程は、実際に近親者を失った多くの日本人にとってみればリアリティのあるものであったろう（この点は地上戦によって“ひめゆり”に多くの地上戦による死者が象徴化されていった沖縄の場合も同様であろう）。

日本国外において、“ヒロシマ・ナガサキ”という抽象的で核と結び付けられた人類史的に象徴的な空間が認識されていったのに対し、少なくとも戦争の記憶が人々に共有されていた時期においては、原爆犠牲者は空爆犠牲者・戦争被害者の象徴として位置づけられてきた。したがって、広島と長崎の犠牲者のみを他の空爆犠牲者と峻別して日本社会が位置づけてきたとは言いがたい。「唯一の被爆国」という頻出用語が指し示すとおり、原爆は単に広島市民や長崎市民の頭上にではなく、あくまでも日本人の頭上に落とされたのだ。ここに戦後の日本社会がその戦争被害のみを突出して意識する心理構造が形成される一因があったと思われる（もちろんこの事象のみに還元できるわけではないが）。一方で沖縄戦の死者は地上戦の死者であり、「戦争そのものが過ち」とみなさない限りにおいて、それがいかに悲惨なものであっても国民国家の非常さの犠牲の範疇とみなされる。このような思考回路の結果、本来は日本人

が沖縄戦において負わなくてはならない加害の責任は、いつの間にか日本人を被害者とする思考によって相対化される。象徴としての原爆と“ひめゆり”の違いは、“日本人の死”と“沖縄人の死”の違いでもある。そしてその二つの“死”の意味は、“人類全体に対する犠牲”と“住民の死”という差異を含んだ形で語られる⁵。

そして、この死者に対する認識の差は、先に述べたように、沖縄戦を跨ぐ、戦前・戦後における日本人の沖縄への態度と見事に一致している。もし沖縄にのみ原爆が落ちていたとしても、はたしてわれわれ日本人は、その経験を自らの経験、自らの頭上に落とされた経験として共有していたであろうか。その後も、日本人は基地問題を「沖縄問題」として日本人全体の問題から切り分けるといふ、沖縄戦の後も変わらぬ沖縄人への無関心さの一方で、彼らに安全保障の重責と基地被害というリスクを負わせ、自らは安全と経済発展という果実のみを受け取り、その構造に対してすら無自覚・無知であるという態度をとり続けてきたのである。これは戦前から一貫している、沖縄という“他者”を切り離し続け、資源化する視点の継続といえるだろう。死者の意味づけにおける重みの違いを放置してきたことは、現に同じ時を生きている生者の存在の重みの違いに直結してきたのである。沖縄戦の犠牲者に対する微妙に差異化された視線、同時代を生きる沖縄人に対する微妙な距離感。これらは基本的に同質である。

同様の構造は、日本が植民地支配を行ったアジア地域についてもみてとれるだろう。かつて沖縄や中国あるいはアジアで、他者を支配し、ときには犠牲を強いることによって生き残ったわれわれの祖先。その帰結として“私”が存在し、現在の日本社会が存在する。“私”の代わりに生まれてきたかもしれない“誰か”の、未然の死。その“生”への可能性を未然に封殺したうえに、われわれは位置している。“人類の愚行の犠牲”ではなく、“私の生存のための犠牲”としての死。“誰か”ではなく、“私”が現存している合理的理由は何か。それは、もちろん優生学に代表されるような生物学的理由でもなければ、神の意志による

ものでもない。歴史的な国民国家の選択と暴力の結果である。われわれは、生まれてきたかもしれない“誰か”の生命や未来を、われわれの生命や未来に置換して奪い、われわれが存在するために資源化して、その犠牲の上に存在している。

この点にかんする認識が現在の社会に欠落しているゆえに、たとえば「戦争は過去の世代の起こしたことで、我々の世代には関係ない」といった知的に怠惰な言説が繰り返されることとなる。この認識の欠落は、他の“誰か”の未然の死の犠牲の上に我々が存在しているという、究極の利益を問題化しないという暗黙の前提によって導かれたものである。われわれの存在自体が、“誰か”の生存の可能性を奪い、資源化してきたことと深く結びついていること。さらには、われわれの繁栄が現在も続く犠牲の上に成り立っていること。このわれわれの存在の根幹にかかわる論点を社会思想として問題化せず共有してこなかったことが、この社会から他者への想像力を奪ってきた一つの要因となっているように思われる。植民地主義は、学校で習ったような遠い過去でも、われわれと断絶した人々のものでもなく、われわれ自身が、われわれ自身の存在の在りようにかんする根源的問題として、現在において直面している問題である。それを忘却し無頓着になること、過去の植民地主義の結果を忘却することは、新たな植民地主義を再生産することに繋がる。

2. 国民国家と植民地主義の源泉

このような現在まで一貫して継続している植民地主義の背景には国民国家に基づく社会システムが存在しているように思われる。近代市民革命を経て世界が国民国家に分割されてゆく過程において、それぞれの国民国家は、国民国家を単位とした経済・社会システムを構築してきた。国民国家はその構成員に全面的な安全を保障する一方で、国民国家間においてはつねに競合的な関係を築いてきた。国民経済という国民国家単位の経済の競争システムが存在し、資源の争奪戦が繰り返されてきた。人々の豊かさは国民経済の状態と直

結してもいた。そして国民国家の富は企業などの中間団体を経由し、最終的には家族というユニットにおいて配分されてきた。したがって近代国民国家社会において、経済（国民経済の状態）と家族における結合の様態はもっとも重要な関心事であり続けた。そして近年グローバル化の進行が顕著になるまで、この構造は比較的自明のものとして受容されてきたといえる。

国民国家の勃興期において、何よりもまず重要だったのは、社会の生産力を向上させることであった。その背景には国民国家間における経済的競争関係があり、その延長としての戦争のリスクはつねに存在した。戦争はしばしば資源の奪い合いを契機として発生してきた。そのような緊張した国民国家間の関係を生き延びるには、強い軍隊を保持し、その軍を支える産業力が必要であった。「富国強兵・殖産興業」という近代日本初期の社会的スローガンは、国民国家に求められた事情を的確に表現したものであったといえる。

その要求に応えるために、各国政府は産業の基礎である重工業を中心に投資を行い、資本と労働力の集約を図った。日本においても1901年に八幡製鉄所が操業を開始し、政府主導で工業化が押し進められた。その過程で少しでも多くの安価な資源と労働力の獲得が必要になり、植民地経営が本格化する。外部に資源獲得のための支配を行い、内部には様々な“マイノリティ”を設定して周縁労働を安価に担わせる。もちろん植民地主義はそれ以前にも存在していたが、この国民国家体制の下で再編成され、徹底化されることとなる。たとえば、現在の日本社会におけるアイヌ、沖縄、在日コリアン、戦争責任等の諸問題はこの時期の資源獲得指向と周縁労働化と深く結びついている。

また国民国家の工業化の過程においては、フォーディズム（fordism）的分業体制が一般化する。すなわち、低コスト・少品種・大量生産という産業システムの効率化の敷衍である⁶。これはつねに他国との競争関係にある国民国家において、重工業を中心に軍需物資とそれを支える産業の育成が急務であったことと関係していると考えられる。軍関係の物資は、たとえば銃と弾薬のよ

うに規格が統一され、かつ量が多いほど効率がよい。この点は軍関係に留まらず、急速な経済発展を遂げる社会においても効率のよい資源の活用法であった。いうまでもなく、フォーディズム的生産システムは各工程を徹底的に細分化することによって成り立っている。

やがてこの分業システムは、生産現場を越えて社会思想および社会システムとして拡大してゆく。その過程で様々なカテゴリーが作られた。たとえば人間を外性器の形状、すなわち“性”によって2つに区分する“性別”という発想はその典型である。女性は産業システムにおける周縁労働者、ならびに家庭という場における維持労働者としてカテゴリー化された。すなわち男性を補佐する低賃金周縁労働者、ならびに家事労働に代表される維持労働とリプロダクション（次代再生産＝出産）に特化した存在である。この性別役割分業は、国民国家システムの要請とも深くかかわっていた。国民経済を發展させ、強大な軍事力を保持し、他国との競争に負けないためには、一定数以上の人口が必要である。豊かな人口があってはじめて大人数の兵卒も招集可能であり、その軍を支える産業労働力も確保できるからだ。そのため、人口の維持（願わくば増加）は国民国家にとって死活問題であった。妊娠・出産によって生産ラインの前に立てなくなる可能性のない男性を経済労働に特化させ、女性を維持労働と次代再生産に特化させる国家戦略はこの要請を満たすものであった。女性は安価な単純労働力として、人口を維持する再生産労働力として、つまり国民経済活動と家族（家庭）の柱という国民国家を支える二つの急所において男性から二重の搾取を受けていたことになる。国民国家システムは女性を分化することによって成り立っていたシステムであるともいえよう。

外部あるいは内部において他民族や他民族の資源を資源化するという直截な植民地主義を実践すると同時に、女性の例にみられるような社会的分業システムが国民国家のメインストリームであるマジョリティ男性に利益をもたらす。このような構造を固定化し、利益を恒常化させるためにカテ

ゴリー化が行われ、カテゴリー間での不平等が固定化された状態こそ差別と呼ぶにふさわしい。

アルベール・メンミによる有名な人種差別の定義は「人種差別とは、現実の、あるいは架空の差異に、一般的、決定的な価値づけをすることであり、この価値づけは、告発者が自分の攻撃を正当化するために、被害者を犠牲にして、自分の利益のために行うものである」というものである（Menmi, 1994=1996: 4）⁷。この構造は人種差別に限らず、すべての差別関係および権力の非対称関係において発見することが可能であろう⁸。利益のために、実際あるいは架空の差異を利用してカテゴリーを作り上げる。社会的分業の要請からなされたカテゴリー化は、さまざまな本質主義的言説を身にまといながら、そのカテゴリーの存在を正当化する。いわく、体つきの違い、脳の違い、DNAの違い……。そしてあたかもそのカテゴリーが必然の結果として存在しているかのように捉えられ、不平等も合理的な区別の結果であるとされる。まさに、犠牲の正当化である。

考えてみれば、話の次元こそさまざまであるものの、他者の犠牲のうえに自らの利益をえて恬として恥じない心性は、この社会のいたるところに遍在している。人間は平等といいながらも、性別や生まれた環境や出身階層によって明らかな不平等が存在している。所得と社会的地位に恵まれた家庭に生まれた者は、それだけで生まれながらにして多くのものを手にしている。一方でそうでない家庭に生まれた者は、恵まれた者が生まれながらに手にしているものを手に入れるだけで人生の大半を費やし、それでも、なおかつ手に入れられるかどうかは不明である。また男性に生まれた者は、女性が望んでもなかなか手に入れられないさまざまな特権を生まれながらに手にしている。同じように生を受けながら、生まれながらには手に入れられない者たちの存在と享受できない利益。その利益の欠落の上に“恵まれた者”の利益は成立している。“恵まれた者”とは、“恵まれない者”の犠牲を、己の利益に変換して生きてゆく者の別名である。

そして“恵まれない者”たちの努力は、それが現在の社会システム下における成功を目指すものである理由によって、結果的に現在の社会システムを強固にする。その結果、すでにエスタブリッシュメントとして地位を確立している者とおよびその後継者の地位は、より安泰となる。これらは、利益の受益者がその利益に無自覚であること、他者の資源化に無自覚であることに端を発した構造である。場合によっては、資源化される側にいる者自身も“資源化される”ということに対して無自覚であるかもしれない。このようなことは、「1」において述べた、己の存在を成り立たせている根源的な利益にかんする無自覚さという、この社会に通奏低音のように存在している植民地主義の残滓（というよりも、むしろ現代的な植民地主義の再生産）とは無関係ではありえないだろう。

3. 心性あるいは心的傾向としての植民地主義

植民地主義において問題化されるべき利益と犠牲。そして社会に偏在する利益と犠牲。これらの事象を前に、その構造と、とくに支配の実践における“手法”というか“手口”にかんして、類似性を感じないわけにはいかないだろう。

すなわち植民地主義とは何かという問いは、経済、政治、社会、文化のいずれの文脈を問題にするのであれ、どこが植民地なのかという地理的空間の問題にまずは置き換えられ、次にその地理的空間が、あらかじめ設定された普遍的な植民地主義を体現する部分として定義され、分析され、了解されていく。修辞学的に言えばそこには、種でもって類を指し示す提喻的な関係が存在するのであり、かかる部分と普遍的全体の予定調和的な関係を前提として、普遍を語りながら部分を命名する超然たる分析者が登場することになる。

— (中略) —

「どこが植民地主義の支配を受けた場所なの

か]、「どこが植民地主義の支配を受けているのか」という設問が、植民地主義研究とそれを担うものたちを導いていく。またこの設問は、たとえ明示的に言及されなくても、「どこが植民地主義を受けていない場所なのか」、「どこが植民地支配から脱した場所なのか」という問いを、いつも傍らに並存させている。いいかえれば、植民地主義を地理的に確定することは、植民地主義あるいは脱植民地主義の分析を可能にする地ならしなのである。

— (中略) —

「いつが植民地主義の支配を受けた時期なのか」という設問が、植民地主義研究とそれを担うものたちを導いていく。またこの設問は、たとえ明示的に言及されなくても、「いつが植民地支配から脱した時期なのか」という問いを、いつも傍らに並存させている。いいかえれば、植民地主義を時期区分的な歴史により確定することは、植民地主義あるいは脱植民地主義の分析を可能にする地ならしなのである。

(富山, 2002: 6-7; 9, 傍点原文ママ)

ここで富山一郎が指摘しているのは、植民地主義を地理性と歴史性にのみ結びつけて理解することによって、植民地主義に対する考察を、事前に準備された植民地主義の支配をめぐる諸コードに現実の支配を参照させるという作業に回収するだけに終わらせてしまう危険性についてである。また、そのような参照作業をある意味では機械的に行う超越者の存在する余地をうみ出すことに対する批判である。

たしかに植民地主義を考える際には、いつ、どこで、誰によって、誰に対して、という点を外すことは出来ないだろう。しかし、これらの認識枠組みだけでは、なぜ、どのように、という点について、既存の植民地支配のコードから外れた力学は問題化できない。既存の支配のコードからもれ落ちた、未だ問題化されていないことを問題化する枠組みが欠落しており、それを埋める概念や作業が残されている。さらに制度とのかかわり。同じく富山は“ポストコロニアリズム”という用語

で重要なのは「終わっていないのに終わったとされている点」にあると指摘している(富山, 2005:172)。制度的な植民地支配は終わっても、いまなお続く実効的な植民地主義。植民地主義を土地と歴史に結び付けて理解しているかぎりにおいては、この現在の植民地主義を問題化する方策はない。植民地主義はけっして地理的な意味での土地に限定された問題ではなく、また時代区分に限定され、歴史的に参照されるような性質の問題でもない。個々の支配について、時間と場所と当事者を特定することは重要ではあるが、その特定作業の過程で特定されなかった事柄や人々に植民地主義がかかわっていないということにはならない。ここで必要になるのは、支配と資源化を欲する側の欲望、心を問う視点であり、その政治的手法を問う視点である。

とはいえ、世の中には、さまざまな次元で不平等が存在している。これらの不平等を一つの概念をもって一律に考えることには無理があるし、なすべきでもない。しかしながら、それぞれの不平等の、それぞれの次元に応じて、そのポリティックスの過程においてある種の近似した心的傾向が存在することに意識的であること、あるいはそのような心的傾向の存在を参照しておくことは、世にある多くの不平等な関係を考える際に、決して無駄ではないと思われる。

すなわち、「他者あるいは他者の財産を、自らの利益のために資源化することに無自覚であること」という意識が国民国家社会には遍在している。このような心的傾向をここでは仮に「心性としての植民地主義」と名づけたい⁹。この概念における“植民地”とは、具体的な土地に限定されたものではない。それは“植民地”という言葉に表象される「資源化すべき他者あるいは他者の資源」を意味している。もちろん、これまで植民地として知られてきた土地をめぐる政治において、この象徴的意味での“植民地”は、その中心に存在している。しかし、この心的傾向における“植民地”という言葉の射程は、単に現存する土地のみを指すものではない。たとえば、両性不平等の関係における“植民地”とは、男性が資源化しよ

うとする“女性の労働力”であったり“リプロダクション（次代再生産）能力”であったりするだろう。労働力や身体といった、必ずしも“土地”と結び付けられない“資源”も、象徴的に包含されている。

繰り返すが、この象徴的な“植民地”をめぐる問題は、地理的な土地に限定された問題ではない。資源化される対象の種別にかかわらず存在する心的傾向を顕在化させる視点であり、“資源化しようとする側”の欲望と心を問題化する視点である。なぜ他者を欲望するのかというその動機と利益を顕在化させる回路を準備することによって、その権力関係における当事者の心性をポジショナリティの問題と結びつけることがこの概念を導入する一つの目的である。

そこでは単純かつ固定的な加害者や被害者といった関係性も疑われる。植民地主義の複雑な支配関係においては、たとえばモデル・マイノリティのように被害者でありながらも、加害者の利益に自身の利益を同一化し、他の被害者を抑圧する側に回る人々も存在する。被害者であると同時に加害者であることを強要された人々である。このように他者を支配することの共犯者であることを強要された人々のポジショナリティは、単に制度の問題ではなく、心的傾向とそれをうみ出す利益（強制され、他に選択肢のない利益）を通じて考察する必要がある。それはモデル・マイノリティとなる人々の心的傾向のどの部分に植民者が働きかけ、どのような利益を提示し、どのように良心を麻痺させていくのか。そのような働きかけを行う植民者の心的傾向の源泉は何か、といった諸点を考察する必要がある。したがって、関係性の数だけそこで問題化されるべきポジショナリティは存在し、同時に「心性としての植民地主義」は遍在しているので、複雑に絡み合った蜘蛛の糸のような支配関係を解きほぐして考えるためには、植民地主義という概念を制度や単純な利益の問題だけではなく、心的傾向の問題として再構成することが必要である。

ただし「心性としての植民地主義」は、従来の植民地主義という概念のように、単に参照可能

（参照するための）なコードの体系ではない。「心性としての植民地主義」は、もしそれが単に「心性の在りよう」を類型化して参照されるべき「心性のコード」を列挙するものに終始するならば、富山が批判したように、「種でもって類を指し示す提喻的な関係が存在するのであり、かかる部分と普遍的全体の予定調和的な関係を前提として、普遍を語りながら部分を命名」するためのものに堕してしまうだろう。この概念は、各々の支配関係を一律の土俵で比較衡量して論じるために導入されるのでもなく、支配する側の心的傾向の共通コードを設定し、それを元に各事例を分析したり命名したりするためになされるものではない。それでは、単に植民地主義を考察する際に参照すべきコードの範囲を拡大したに過ぎない。

「心性としての植民地主義」という概念は、むしろ制度や歴史に別の評価軸を加えて組み合わせることにより、現前にある支配関係の個別性と利益の源泉をより深く理解するために用いられるべきであり、心的傾向の問題として扱うことによって制度や歴史に回収されない、コロニアリスト（植民地主義者＝植民地主義の実践者）の責任を明確にするために用いられるべきものである。

すなわち、その意義は第一に植民地主義を制度の問題ではなく、コロニアリストの欲望や心の問題として再定義することによって、コロニアリストに己の犯罪性を意識化させる点にある。植民地主義が制度の問題に留まるかぎりには、富山が指摘したようにその制度的認知枠組みから外れた支配関係は意識化できない。同時に制度であるとされることによって、コロニアリストが受け取る利益は自明化され、それが権力の行使であり、支配の果実であることを、当の支配者であるコロニアリストは自覚することができない。その支配と利益は、制度であるなしにかかわらず、コロニアリストの欲望の問題であることを明示し、支配の継続か放棄かは、コロニアリスト自身の心の問題として選択されていることを示す必要がある。

第二の意義としては、植民地主義をコロニアリスト側の心の問題とすることによって、コロニアリスト同士が問題を共有化できる点にある。制度

の問題としているかぎりにおいては、それに付随する利益を肯定する意識がコロニアリスト同士の対話を不可能にする。すなわち「だって制度で決まっているし、利益があるからいいじゃん」という認識が、それ以上踏み込んだ対話を、コロニアリスト同士においても成立させないののである。植民地主義によってもたらされる利益が制度と結びついて、それ自体を認識困難な状況においては、コロニアリスト同士が自らをコロニアリストであることから脱却させようと思っても、そのことを語り合う場を設定すること自体に大きな困難が伴う。しかし心の問題として再構成することによって、自分たちの心のありようをめぐる対話を設定し、支配しているという状況についての情報を共有することも可能になる。

第三に、植民地主義を欲望とその手法の問題として意識化することは、地理的な土地の問題としてではなく、現在、社会に遍在する不平等関係に対して意識的であることの一助となるだろう。さまざまな支配関係の文脈は多様であり、それらを一律に論じることはできない。しかし、他者を資源化しようという欲望は、それぞれの文脈を超えて共通している。同時にコロニアリストが支配を行う“手口”・“手法”は、驚くほどバリエーションは少ない。この“手法”については後述するが、これらの“欲望”と“手法”という観点から様々な心的な植民地主義の存在をあぶり出し、問題化し、コロニアリストの克服すべき課題として共有する道に繋がる可能性を模索できるのではないだろうか。

最後に、この「心性としての植民地主義」を考える際に絶対に忘れてはならない留意点を2つ指摘しておきたい。まずは第一に、この概念は世にある様々なコロニアリズムの心性を一律に論じ、知識の見取り図の中にマッピングすることが目的ではないということである。繰り返しになるが、さまざまな権力関係にはそれぞれの文脈がある。たとえ現象として類似が見られたとしても、その社会的意味や当事者にとっての意味は異なるのだ。それぞれの権力関係は、最終的にはその文脈の中で検討されなければならない。沖縄と女性差

別とアイヌ差別と水俣病は異なるのだ。しかしながら、その異なる事態のなかに、異なっているにもかかわらず類似した心的傾向と支配の手法があることに注目することは無駄ではない。その類似を手がかりに、顕在化していなかった欲望や支配の手法を問題化する契機がうまれるからである。むしろ、個別の権力関係においてどのように欲望が発動され、どのような支配のための手法が隠されているのかを問題化することにより、その支配関係の特徴をより明確に浮き彫りにできると考える。

二つ目の留意点は、文字通り、土地と結びついた支配が存在するケースである。より正確に言えば、明確な支配制度としては現存しなくとも、依然として土地と結びついた支配が存在する場合である。たとえば沖縄の場合がこの典型だろう。明確な制度としては、植民地制度は存在しないが、実効的に米軍基地と結びついた支配が存在している。狭義の植民地主義そのものが、不可視化されて存続している。このような場合、土地の問題を無視して考えることは、やはり避けられない。しかしながら、富山一郎が指摘したように、地理的な土地や歴史性にのみ関連付けて沖縄を考えるなら、そこで実践されている植民地主義のごく一部しか理解できないだろうし、コロニアリスト側の問題を矮小化し、さらには免罪さえしかねない。この点においても「心性としての植民地主義」という概念は有効であると思われる。土地の問題とされていることの大部分は、心の問題として再定義が可能であり、それゆえに土地の問題とされ意識されなかった心による支配の実態を明示することが可能になるからだ¹⁰。このような場合、土地の問題として語られてきた事柄を、注意深く土地から引き離し、心の問題として再編成する作業が必要となる。

このような留意点を踏まえたうえで、「心性としての植民地主義」という概念をさまざまな支配関係の検討において導入するのであれば、植民地主義を制度ではなく心性の問題として捉えなおし、さまざまな権力関係において実践されている“心の暴力”を契機に、それぞれの関係の社会的

文脈を問い直す作業に繋がるだろう。

4. 「心性としての植民地主義」とその手法

このような心的傾向としての植民地主義を考える場合、その表象となる“手口”・“手法”に注目することが重要である。「心性としての植民地主義」とは「他者あるいは他者の財産を、自らの利益のために資源化することに無自覚であること」と述べたが、このような資源化を可能にする心性は、必然的に自己欺瞞と深く結びついている。あからさまに他者を支配しその利益を享受しているという状況は、多くの人にとって居心地の悪いものである。多く人は、自分は善良な人間であると信じたいし、実際信じている。しかし植民地主義によってえられる利益も手放したくない。その結果、支配関係は存在しないという、自己欺瞞のロジックを準備するのである。あるいは、そのような自己欺瞞の構図を白日の下に晒すような思考の回路を、事前に封鎖しようとするのである。本節では、そのような手法を簡潔に整理したい。このような手法は、さまざまな異なる権力関係において、驚くほど共通して発見できるものである。そしてこのような手法が—おそらく私自身を含めた自分の中に—発見されるとき、そこには「心性としての植民地主義」の痕跡がみられるだろう。以下に論じることは、いずれもすでに多くの論者によって議論されていることであるが、「心性としての植民地主義」という観点とのかかわりから、再整理を行いたい。

4-1. 言説の欠落

多くのコロニアリストは、自分が支配を行っているとは、心の底から思っていない。思っていないから支配を継続できるのだ¹¹。したがって、その事実を指摘されたコロニアリストの99%は不当な侮辱と感じて逆上する。言い換えれば、指摘されて逆上したらコロニアリストの証拠ともいえるだろう。最悪なコロニアリストとは、「自分は差別をしていないけど」と平気で言える者である。ある行為が差別や支配であるかどうかを判定でき

るのは、行っている側ではなく受けている側のみである。自分が自分の行為を判定する権限を保持していると確信している点において、このような言葉を吐く者は“コロニアリスト確定”であるといえるだろう。

そもそも、なぜコロニアリストは自分の行っている支配や差別に無自覚なのだろうか。それは、コロニアリストにとって支配を行うことによってえられる利益があまりにも当然視されていて、それを言語化する必要がなかったことに一つの源泉を求めることができるだろう。支配とは説明するものではなく実践するものなのである。支配によってえられる利益を説明する言説が欠落しているために、コロニアリストは自らの支配と利益を認識できない¹²。そして利益の保全のために、このような言説を未然に封殺するようになる。その嗅覚は鋭敏である。実際のところ、自分の中に驚くほど鋭いアンテナが備わっていることに愕然とせざるをえない。自らの支配にかんする感受性は鈍いのに、その支配を告発する言説には敏感なのである。この感受性の差こそ、「心性としての植民地主義」を実効的に支えているものである。

4-2. 区別する

コロニアリストは、自らが行っている支配とそれによってえられる利益があまりにも身近であるために、それが支配であるということに気がつかない。同時に大量の本質主義的言説が導入され、その利益を正当化する。その中でも、もっとも頻繁に用いられる言説は「差別ではなく区別である」というものである。支配を「合理的”な”違い”」を根拠に正当化するのである。さらに、この“区別”という概念を使うことによって、差別や支配を顕在化させないという効果も狙える。

たとえば、典型的な“区別論”として男女の体力差という言説がある。つまり、男女は体力および体の構造が異なるため、社会的分業を行うのは当然だという考え方である。いうまでもなく、このような見解は多くの論者によって否定され、論破されている古風な言説である。たとえば体力差の言説について、多くの“体力差論”者が引き合

いに出すのは100m走やマラソンでの世界記録である。これらの世界記録は男性のほうが優れている、という論法である。しかし、100m走の記録分布グラフは（母集団は異なるものの）平均値が少しだけずれた正規分布の線が重なったものであり、性差よりも個人差のほうがより重要な意味を持ち、必ずしも男性のほうが体力があるとはいえない（しかも世界記録レベルの差など、統計的には異常値であり、誤差の範囲である）¹³。また、そもそも男性主導で発達してきた競技である100m走やマラソンで体力を比較することは、その基準において偏っている。なぜ“100年間長生き競争”では体力を計測しないのだろうか。そのような基準を適用するならば、女性の方が体力において男性に勝っているともいえるのに（もっとも男女の役割分業が逆転すれば、男女の平均寿命も逆転する可能性は大いにあるが）。かように、“体力差論”はその基準においてもアンフェアである。また、女性の再生産能力についても、出産後一定期間休むだけで男性と変わるところはないし、授乳期以後の子育てにいたっては女性の身体構造とは無関係である。

このような“身体論争”は繰り返し起こってきた。頭蓋骨の大きさ、脳梁の神経線維、ホルモン……。先にメンミが指摘したとおり、「現実の差異に、一般的、決定的な価値づけを」しようとするものばかりである¹⁴。そして科学の援用。この“区別”の正当化のために、コロニアリストは必ず最新の科学を援用する。しかし、これがいかにも見当はずれなのだ。まずナチス時代の優生学に典型的にみられるように、援用される科学の信頼性が低いこと（追試による証明が十分ではない新説ばかり）、次に援用される科学の文脈が唐突すぎる（職制分業を説明するのに生殖能力を持ち出してみたり）など、ここまでくると科学への冒涇ではないかと思われるような言説が溢れている。そしてそもそも、科学というフィールド自体、男性主導で発展してきたことも忘れてはならないだろう。

問題は、幾度となく論破されてもこのような“身体論争”が繰り返し起こる点にある。おそらく

く、提唱者がこれらの議論が論破されていることを知らないまま、次々と類似バージョンが登場するということには、何らかのコロニアリスト（この場合は男性）の心的傾向が関係しているだろう。それは両性不平等の根拠を、人間の力の及ばない“自然=身体”に求めることによって、自らの支配の不当性に向き合わずにすむことに起因しているだろう。すなわち“科学”という言説を援用して、自身の支配者性を自分自身からも隠したい欲望が存在している。

そしてこのような“区別論”は、さらなるメリットをコロニアリストにもたたらす。それは、被支配者自身にも「区別だ」という意識をもたせることができるという点である。露骨に「差別している」といえば、被差別者がブチ切れるのは目にみえている。しかし「これは区別だよ、だって科学でも……」といえば、被支配者は黙ってしまう。なぜなら科学や“区別論”を支えている情報は、そもそも力と特権ともつコロニアリストが独占しているからだ。被支配者は一少なくとも同じ土俵上では一資源としてもっている情報量の不均等さゆえに反論できない。

また、人間誰しも当然ながら、自分が差別や支配を受けている従属した存在であるという状況は嫌なものである。その状況が変えられそうにないという絶望が見え隠れするとき、被差別者としての自分に向き合わざるをえない。しかし「自分は差別・支配されている」という現実を受け入れ難いものである。そこに“区別論”が、コロニアリストによって目の前に差し出される。“差別・支配”ではなく“客観的”な“区別”であるなら、たとえ不自由はあっても、惨めな思いをせずに生きてゆける。そして被支配者が、その支配の根拠となっているカテゴリー化を“区別”として受け入れるなら、コロニアリストが利益を失うことはないし、それが差別・支配として問題化されることもない。すなわち、“区別”とは、被支配者が差別や支配を受け入れるための現実逃避の方策として、コロニアリストによって準備された概念でもある。

“区別論”こそ、コロニアリストの欲望に“正

当な根拠”を与え、支配に対する罪悪感を軽減するレトリックである¹⁵。

4-3. 転嫁する

“区別論”が発動できないほど明確な支配関係が存在するとき、次にコロニアリストがとる戦略は責任の転嫁である。差別や支配の原因を被支配者に転嫁するのである。すなわち「差別されるほうにも原因がある」。この転嫁の心的効果は、“区別論”とほぼ同じ罪悪感の軽減である。この転嫁には3つの段階がある。まず、事態の命名における転嫁。「女性問題」、「沖縄問題」、「障害者問題」のように、その問題があたかも女性や沖縄や障害者に内在しているかのような命名が行われる。いうまでもなく、これらの問題は女性を不平等に扱ってきた男性が問題であり、沖縄人を不当に扱ってきた日本人が問題であり、“障害者”を“障害者”として社会から排除してきた“健常者”の問題である。このように事態の命名における転嫁によって、真の当事者たるコロニアリストは勝手に自らを問題から切り分けている¹⁶。

さらに次の段階として、差別・支配の原因を被支配者に転嫁する。このような例は歴史上数多く存在する。有名なものとしては、キリスト教団発展の過程で男性修道士の女性への恐怖（自らの発情への恐怖）から、そのような発情を促す女性を「罪深い存在」として宣言したことが挙げられるだろう（小倉，2001：112）。自らの欲望・煩惱をその対象に転嫁するというこの発想は、後にミソジニー（女性嫌悪）を形成することに繋がったし、現在も性犯罪被害者に浴びせかけられる「そんな格好で歩いているから……」といった発想に繋がっている。

最終的な段階としては、加害者と被害者の逆転現象が起こる。すなわち、被害者に加害を誘発する原因・理由があり、加害者も一種の被害者であり、被害者にも事態を誘発した加害責任があるとする暴論だが、この逆転現象はきわめて頻繁におこる。この異常な状況については、マルコム X やサイドラによる多くの論考が存在している（野村，2003：137-140；野村，2005：108-114）¹⁷。

この逆転現象を考えると、思い起こされる場面がある。それは“水俣病”事件の過程で、いわゆる自主交渉派と呼ばれた新認定患者たちがチッソ本社で島田賢一社長（当時）と交渉した1971年12月8日の模様についての記録である¹⁸。対等な人間としての対話を求める患者たちに対し、話をはぐらかし官僚的答弁に終始するチッソ側。業をにやした患者たちは島田社長を取り囲み怒声を浴びせ、激しく糾弾した。深夜にまでおよぶ交渉の末、島田社長は高血圧で倒れ、担架で運び出される。運び出される直前、ソファに横になった島田社長の枕元で、患者である川本輝夫は号泣しながら以下のようなやり取りをしたという。

川本輝夫 私たちも熱でもう頭が混乱しそうですよ。胸ははりさけそうですよ。ましてやこんな病人を相手にしなけりゃならんという事は悲しいことですよ¹⁹。私たちも。

入江専務 よくわかります。

川本 何を好き好んで、第三者が見たら、いかにも私たちが鬼みたいに見えるでしょう。こんな病人をつかまえて。

入江 そんなこと言ってんじゃありませんよ。こういう状態ですから、お医者さんもああ言われますから。何かまた返事いたします。

川本 （涙声で）何も話になつたらんのに……
ああああああ……。

入江 川本さん、そう泣かんでくださいよ。

—（中略）—

川本 （泣きながら）俺たち、鬼か。

（石牟礼編，1974：82-83）

この交渉において、当事者双方はどちらが加害者でどちらが被害者であるかは、明確に理解している。患者たちの怒りの声は、自らの全存在をかけた正当な叫びである。しかしその存在の重さが重ければ重いほど、その告発の言葉は力を増し、患者自らが「俺たち、鬼か」と涙ながらに、かつ当惑しつつ自問する場面までうむ。もちろん、患者たちを“鬼”にしたのはチッソであり、患者

たちにその責任は一切存在しない。患者たちは島田社長を傷つける意図で罵り倒したのではない。実際、これに続く会話で川本は自分の父親（重症患者）の最後の様子を語り、自らも看護師の資格を持つ彼は高血圧や狭心症がどのような症状でどのくらい苦しいのかを自分はよく知っていると、涙ながらに語る（石牟礼編，1974：84-85）。自分が傷つけられたことに対して、いくら加害者とはいえ島田社長を昏倒に近い状態まで追いやってしまったことへの忸怩たる思いと、そのような状況まで自分を追い詰めるチッソへの怒りの入り混じった告白である。

そこでは瞬間的に、加害と被害が入れ替わったかのような、奇妙な関係性が顔をのぞかせる。それはもちろん正当な被害者の告発なのだが、その瞬間だけを切り取れば、被害者自身が「俺たち、鬼か」とまで感じるような瞬間がある。このような当事者双方が加害／被害の立場をよく理解しているようなケースにおいてすら、加害者と被害者が逆転しているかのごとき瞬間への流れは存在する²⁰。

実際、この後チッソ側は社長の体調不良を理由に交渉を引き延ばしにかかる。正当な怒りの表現が、あたかも加害と被害の逆転のように文脈を読み替えられ、本来の加害者によって倒錯され、悪用される。“水俣病”のように加害と被害の関係性がこれ以上ないほど明確な場合ですら、このような瞬間は顔を覗かせる。加害者が自らの加害に無自覚であるような支配関係においては、より容易にこの“倒錯”は起こりうる。

いつの間にか、加害者と被害者が入れ替わる。コロニアリストにおける被害意識は、自らが加害や支配を行っているという自覚が欠落しているために形成可能な意識である。それは人の足を踏みながら、踏んでいる足が痛いと訴えるようなもので、単に被害妄想であるのだが、しかし当のコロニアリストにとってはリアリティをもった“被害”として受けとめられやすい。“被害者”と思っている人間は自らの責任を考える必要性を感じない。何を遠慮することがあろうか、そのような理不尽な“加害者”には正当な攻撃を加える権利が

ある。そこに立場の逆転があり、自分が加害者であることを認識せぬまま、正義をすら感じながら支配を継続するメンタリティが発生する。

4-4. 介入し分断する

しかしながら、このような“被害”，すなわち自らが被支配者と対峙し、緊張を強いられる場面を迎えることは、コロニアリストにとっては避けたい事態である。それによって何も利益をえることができないからだ。そのため、コロニアリストは事前に被支配者に介入する。コロニアリストは被支配者が団結することを最も恐れる。そのために、被支配者が集う場に、打ち合わせをしたわけでもないのに、研究者や支援者と名乗る者たちが送り込まれる。彼ら／彼女らは、もちろん善意からその場に出かけてゆく。しかしコロニアリストがそこに行くのは、いわばコロニアリストを代表して彼らを監視する効果をうむ。私自身、かつて“マイノリティ”の役に立てるのではと思ってそのような場に参加したことがあった。しかし私が、日本社会における“マイノリティ”がどのような状況にあり、どのような動きを示しているのか、その動向を見て論文や学会に報告しようと考えていたことも間違いでない。それが善意からのものであれ、学問的使命感によるものであれ、日本人社会からの観察者／監視者であり、社会への報告者という役割を担っていたことは間違いでない。

またこのような話も聞いた。筆者は女子大学に勤務しており、担当するゼミではジェンダーおよび男性による女性差別について議論することも多い。ある時、ゼミの学生がこのようなことを語った。「普段ゼミで話している性別役割分業や男性のずるさについての話題を、他大学のサークルの女子学生同士で話していたときに（彼女は他大学のサークルに入っていた）、同じサークルの一人の男子学生が通りかかった。私（話をしてくれたゼミ生）は、話が盛り上がってきたところだったのでもっと話を続けたかったが、他の全員が即座に話題を変えてしまった」。この経験談が示すことは、たとえ通りかかっただけでも、支配する側の人間のプレゼンス（現存在）は、被支配者に沈

黙をもたらすということである。被害を受けている者は、同じポジションナリティにいる者のみで情報と感情を共有する場が必要であり、支配者側の人間にはたとえ無言で通りかかっただけでもその場を破壊し、沈黙させる力があるということである。

よりひどい事例もある。2005年4月、東京の沖縄県人会青年部が結成25周年を目前にして解散してしまった。沖縄県出身者が2割に満たず、日本人が大多数になり、エイサーなどのイベントのみに参加するものが増え、運営が立ち行かなくなったことが理由だという（沖縄タイムス、2005年4月4日付朝刊）。ほぼ同時期に琉球新報では、西日本各地の沖縄県人会で、沖縄県出身の若者の県人会離れが進んでいることが伝えられた。記事によると「沖縄文化にひかれて県人会に参加する地元住民の熱心な活動が原因。三線を学び、県人会活動を盛り上げる“親沖派”は得難い助っ人だが、違和感を抱いたウチナーンチュが県人会から遠のきだし、内部の混乱から活動を休止した県人会も出ている」とのことである（琉球新報、2005年3月2日付朝刊）。いうまでもなく、沖縄県人会は他の県人会とは意味づけが異なる。そこはかつて“本土”における“沖縄差別”も体験した世代とともに、沖縄を遠く離れた人々が集う場である。筆者自身は、沖縄県人会に参加したことはないが、そこで何が起こったのかは容易に想像がつく。支援者や“沖縄好き”という日本人が、沖縄人だけで集まる場に介入し、沖縄人だけで集まることを禁止し、沖縄人だけで考えたり、話をしたり、考えを交わすことを妨害したのだ²¹。その結果、場そのものが破壊される。そのような場が消滅するか、あるいは機能しなくなれば、コロニアリスト（この場合は日本人）の立場を悪くするような“謀議”がなされる心配もなく、彼ら／彼女らは安泰なのだ。

この状況と平行して、植民地支配でもっとも重要な支配政策、すなわち被支配者の分断が行われる。たとえばコロニアリストの利益を自らの利益に同一化させ、コロニアリストの支配に進んで協力する“モデル・マイノリティ”のような共犯者

をつくりあげ、被植民者間における利益を分断する²²。被支配者が分断されている間（しかも相互に争っていれればなお良い）は、被支配者の力は結集することがなく、コロニアリストは安泰である。かつ自分に笑顔を向けるモデル・マイノリティの存在は、コロニアリストの良心を麻痺させるという効果ももつ。被支配者の笑顔に安堵し、自らの罪悪感を忘却できるのだ。自分の態度は間違っていないのだ、と。

4-5. 賞賛する

したがってコロニアリストは、被支配者の多様性（＝実際のところは分断された姿）をことさら強調する。「被支配者の多様性」というレトリックは、コロニアリストに異議を唱える被支配者を“多様性の海”のなかに埋没させることができるからだ。すなわち、あいつは変な奴だ。あいつが自分に対して友好的でないのは、カテゴリー間に横たわる不平等や不正への怒りゆえではなく、あいつの個人的な資質の問題なのだ、というふう

誤解を招く言い方で、もし気分を害される方には恐縮だが、沖縄を考えるにあたって私は、「沖縄だからカルチュラル・スタディーズ」「沖縄だからポストコロニアリズム」「沖縄だから平和学」「沖縄だから民俗学」というように、沖縄を特定の枠の中に当てはめ、固定化することはしたくなかった。もちろんそれぞれの視点や研究成果はどれも重要だと思うし、先人の業績には大いに影響を受け、敬意を表したいものが数多い。だが私自身は、自分の立場を一つに決め込んでしまうことによって、＜沖縄＞への視点が硬直化してしまうことを恐れたのである。そう、沖縄はまさに多様な側面をもっており、一つの視点に回収することはできない。一から知るからこそ、さまざまな視点を組み合わせ、柔軟に見る立場を確保したい。

（多田、2004：194）

琉球大学で教鞭を執っているという日本人研究

者多田治の上記の発言は、単に学問的視点の次元を超えて、日本人の沖縄に対峙する際の典型的姿勢を示している。民俗学は別としても、沖縄をダイレクトに考えられないカルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムや平和学に意味はない²³。またこの文章には論点のすり替えがある。たとえ「自分の立場を一つに決め」たとしても、それは「沖縄を特定の枠の中に当てはめ、固定化する」ことや、「<沖縄>への視点が硬直化してしま」ったり、「一つの視点到回収する」ことや、沖縄を「さまざまな視点を組み合わせ、柔軟に見」られなくなることはない。

おそらく多田は学問的な次元の話をしているのであろうが、もし「自分の立場を一つに決め」たくらいで上記のような結果になってしまうのであれば、それは端的に多田の研究能力の不足を示している。ただちに他の優秀な研究者に琉球大学教員の職を譲るのが誠実な態度だと思う。またこれが沖縄にかかわること全般の次元についての話であれば、きわめて欺瞞に満ちたものである。なぜなら「自分の立場を一つに決め込む」ことへの拒否宣言であるからだ。カルチュラル・スタディーズであれ、ポストコロニアリズムであれ、平和学であれ、それらの学問枠組みの中で日本人である多田が立たされるのは、文化収奪者、コロニアリスト、基地を押し付けている当事者、という位置である。もちろんこの位置は筆者も多田と共有している。共有しているゆえに、はっきりと指摘しなくてはならない。「位置を一つに決める」こととは、コロニアリストであると認めることにほかならない。

先に富山一郎が批判したような、制度や歴史というスキーム（学問的枠組み）と植民地主義を結びつける思考がもたらす一つの危険性は、ここに紹介した多田の文章のように自らのポジショナリティの責任を回避しようとする言説をうみだしてしまうことである。この回避は悪質である。たしかに、植民地主義を土地や歴史と結びつけることは、地理的空間の問題、時期の問題として、カルチュラル・スタディーズであれ、ポストコロニア

リズムであれ、平和学であれ、制度化されてきた。しかし、多田のように富山の文脈とは異なる位相でこれらの学問と事象（ここでは沖縄）の相関を拒否するならば、拒否した主体は、神のごとき無責任で透明な存在となり、一切の責任を問われない²⁴。すなわち、「位置を一つに決め」ないということは、日本人としての“責任放棄宣言”であり、そのような責任放棄を自身が決定できている多田の“特権の誇示”＝“コロニアリスト宣言”でもある。このような宣言がいかにか沖縄人を軽視し、自己の権力性に無自覚であるかは、対照の位置から考えてみればよい。ふらふらと“位置”を移動できている日本人多田に対して、沖縄人は徹頭徹尾“沖縄人”であらざるをえないのであるから。

そしてこのような自らの位置性を回避したいコロニアリストが、おまじないのように援用するのが“多様性”である。支配する対象が多様であれば、コロニアリストに対して批判的な被支配者も、“多様な被支配者の一部”として無視できるほどに、その存在感を自分の心の中で矮小化できる。そして被支配者も多様であれば、コロニアリストも多様であるという言説が同時に準備され、「自分は最悪なコロニアリストではない」という勝手な自己免罪符と共に、そ知らぬ顔をして、今までどおりに支配を継続することに良心の呵責を覚えずにすむのである²⁵。

これらの自己欺瞞は、植民地主義をコロニアリスト一人ひとりの心の問題として再構成することによって浮き彫りにすることが可能になる。「心性としての植民地主義」が重要なのはこのような局面においてである。学問的あるいは植民地の地理性・歴史性を理由に自身をコロニアリストと認めない者には、その“心的傾向”におけるコロニアリズムをもって思考を迫るほかないのである。

4-6. 強要する

これらの自己欺瞞は、基本的にはコロニアリストが自身の良心を麻痺させ、植民地主義からえられる利益を継続して受け取るために発動されるが、同時にこれらすべての自己欺瞞の手法は、支

配の対象者である被支配者にも強要される。すなわち自己欺瞞の強要である。この結果については、古くは魯迅、マルコム X、ファノン、近くは野村浩也らによって繰り返し論じられている。徹底した被支配者の自己否定感の熟成と共犯化である。しかし、先に挙げた論者の全員が指摘しているように、コロニアリストにとっての自己欺瞞は支配の継続にとって有益であるのに対して、被支配者の自己欺瞞は徹底的な破壊しか、被支配者にもたらさない。

野村浩也は、危険な米軍基地を撤去するように求めてきた沖縄人が、基地の存在によって観光産業に依存せざるをえず、2001年の“9.11”後に日本人が沖縄への旅行を基地の危険性を理由に“自粛”したことが沖縄人に恐怖感を与え、「大丈夫さあ～沖縄」キャンペーンのように、沖縄人の口から「沖縄は安全」という言葉を引き出した、と“観光テロ”の実態を告発する(野村, 2005: 207-220)。またジャーナリストの鎌田慧は、1968年に長崎県対馬で東邦亜鉛鉱業所の下流域で“イタイイタイ病”が発生した疑いが強まった時に、当の発生地域の住民たちの中でも、どうみても“イタイイタイ病”の症状を呈している患者の家族が、頑なに神経痛と言いつ張り、“イタイイタイ病”の存在を否定する様子を描いている。それはその発生集落に住む人の多くが鉱山で働いており、集落全体が鉱業所に依存して生活していたからであった(鎌田, 1991)。

一貫して基地の危険性を訴えてきた沖縄人。基地を沖縄に偏在させることによって安全と経済的發展をえてきた日本人にとって、この危険性を訴える声は消去すべきものであった。しかし、沖縄人にとっては声を奪われることは危険を受け入れることを意味する。“イタイイタイ病”の存在を否定する人々。自分の妻が、姉妹が、母が病気であるということは²⁶、その存在だけで自分たちの生活基盤を侵すことに直結する。鉱山が操業を停めたら、あるいは病気対策の費用がかかるため閉山したら、彼らの生活は立ち行かなくなる。しかし病気の存在を否定することは、妻や姉妹や母を殺すことでもある。

エドワード・サイードは『オリエンタリズム』において、圧倒的な言説生産力と流通力をもつ白人オリエンタリストの“オリエン特観”が、実際に“オリエン特”と命名された地域に住む人々を追い詰めてゆく様子を描いた。コロニアリストの言説流通力と武力(あるいは経済支配力)に対抗する術がない人々は、やがて生きてゆくためにその“つくられた虚像(あるいは妄想)”を受け入れて、そのような存在に現実にならざるをえない。言説が、知と暴力と経済力の権力によって、現実の存在を創り出す。だがそのような“現実”はあくまでもコロニアリストにとって都合のよい欺瞞であって、その欺瞞がコロニアリスト内部に存在する“罪悪感や良心の呵責から逃れるための自己欺瞞”と共鳴しあって、コロニアリズムは継続されるのだ。実際のところ、コロニアリズムとは、その多くが心の問題にほかならない。

おわりに。

自己欺瞞はコロニアリストが自身の植民地主義を完遂するうえで必要不可欠である。コロニアリストの敵は、自身の内にある良心、羞恥心、罪悪感などである。コロニアリズムの核心は、制度でも歴史認識でもなく、心の問題として捉えることによって、世に存在するさまざまな支配関係を考察する一つの手がかりができると考える。

ここで論じられた内容は、すべて筆者自身の問題である。筆者は日本という社会で日本人として生まれ、男性である。このような存在は、どの社会においても確実に他者の犠牲の上に利益をえている。しかしながら、このことを多くの同様なポジショナリティに直面した人々と共有する言葉は少ない。いったいそれはどのようなものなのかを探るために、実際に筆者自身が直面している、あるいは内包しているコロニアリズムを明示化する必要があった。そのために「心性としてのコロニアリズム」という概念を導入した。

さて次なる課題であるが、他の“コロニアリスト”と名指しされるであろう人々と、ここで考えたような自分のコロニアリズムについて、それが

いかなるもので、どのように克服されるべきものなのかについて、考えを交わすことが重要である。そのためにどのような語法が必要であるのかを考えなければならないだろう。

一つのヒントは、映画『ボーリング・フォー・コロンバイン』で一躍有名になったアメリカ白人男性メディア製作者であるマイケル・ムーアのような語法である。彼は『アホでマヌケなアメリカ白人』において、いかに彼自身を含むアメリカ白人男性（原題は“Stupid White Men”である）がマヌケであるかを、ギャグを交えて指摘し、そのマヌケぶりは権力と富を持っていることに起因していることを示す。たとえば、「百万長者の数は、俺たちがナンバーワン。軍事予算の総額も、俺たちがナンバーワン。火気による死亡者数も、俺たちがナンバーワン。1人あたりのエネルギー消費量も、俺たちがナンバーワン。税収の少なさでも、俺たちがナンバーワン。投票率の低さも、俺たちがナンバーワン。記録された強姦件数も、俺たちがナンバーワン。少年犯罪者の既知の処刑の数も、俺たちがナンバーワン。15歳以下の子供が銃火器によって死ぬ確率も、俺たちがナンバーワン。」といった具合に、この形式での記述は延々と続く (Moore, 2001=2002: 205-206)²⁷。

個人的には『ボーリング・フォー・コロンバイン』以降の彼の語法には疑問を感じる点もあるものの、それ以前に彼が製作したテレビシリーズには以下のようなエピソードがあった。それはニューヨークの街角で、数々の賞も受賞したことのあるアフリカ系男性俳優と、殺人罪で服役経験のある白人男性を並ばせ、同時にタクシーを止めさせ、どちらにタクシーが停まるかを実験したものであった²⁸。結果はほとんどの車が白人の前に停まった。停まった運転手（ほとんどが非アフリカ系）は、そのほとんどが安全のため白人のほうに停まったと答える。じつにマヌケな話である。このエピソードはエンターテイメントとして製作され、実際エンターテイメントとしても秀逸であるが、同時にコロニアリストと呼ばれる人々がいかに馬鹿げた価値観に基づいて意思決定をしているかを曝きだす。また別のエピソードでは、タク

シー運転手に扮したムーアが、白人に止められるたびに乗車拒否をするという企画もあった。「白人は危険だからな」などと言いつつ。彼はその論拠を銃の所持や犯罪数などで明確に示す。乗車拒否をされた白人たちの表情は、どれも呆れ憤慨している。しかし、それこそアフリカ系住民の日常である。“対等な体験”とはどのようなものかをこのエピソードは教えてくれる²⁹。

筆者はエンターテイメント製作者ではないので、直ちにこのような語法は採用しないが、一つのヒントにはなるだろう。ほぼ同じことをジャーナリストの斎藤貴男は、自身がジャーナリストになった経緯を語る文脈で「カッコよくありたい」と表現している。怒るべきときに怒らず、社会における主流の価値観に迎合することによって自らの利益や保身を図ることは恥ずかしいことという意味である (高橋・斎藤, 2004: 207-209)。いずれも、権力者でコロニアリズムを実践する心は、醜く滑稽なものであるということを他者に語りかける語法である。単に“醜い”だけであれば、その“醜さ”に価値づけを行い賞賛する視点は、コロニアリズム続行の欲望から容易に生まれるだろう。しかし、「カッコ悪い」「マヌケ」であるということ、このことを共有することによって、一定（あくまでも一定であろうが）のコロニアリズムという心的傾向に対する抑止力が発生する可能性はある。とくに、幼いころからヒロイズムに浸かって成長した男性コロニアリストに、この語法は何らかの効果をもたらすかもしれない。少なくとも、立ち止まって共に考えるくらいの³⁰。

もっとも、このような語法はいくつもの欠点と限界を抱えているだろう。とくに男性のコロニアリストにとって、ヒロイズムというジェンダーを利用したこのような戦略はジェンダーの強化と再生産を副産物としてうみだす可能性もある。また、選択として「カッコイイ」ことが許されるのは、明らかにコロニアルな権力をもった者の特権である。「カッコイイ」か「カッコ悪い」かを選択する特権の構造が解消されずに、もち越されることも問題点である。

もちろん、筆者はコロニアリストが己の心のコロニアリズムに向きあう姿勢と、そこでえられた考えについて、意見を交わす方法は一つに限ったものではないと思う。ここで紹介した語法はあくまでもその一例にすぎない。より効果的で問題の少ない語法を模索中である。いずれにしろ、そのようなコロニアリスト同士の考えの交換というコミュニケーションは、火急に求められているものであり、可能性のある語法（おそらく複数になるだろう）はその問題点を確認しつつ早急に整備されなければならない。「心性としての植民地主義」を問題化するためには、この作業が次の段階として不可欠となると考える。

の死の意味の違いを不問に付すことによって、それぞれの死のポジショナリティを無視し、「国民国家の犠牲者」として個々の死者の尊厳を軽視する視点であると考え。個々の死者におけるポジショナリティを克明にすることこそ、戦争犠牲者の尊厳を等しいものとして考えるために必要な道であると思われる。

¹ 「八月革命説」とは、日本がポツダム宣言を受諾した1945年8月時点で、法論理的には天皇主権から国民主権へと、一種の“革命”があったと解釈すべきであるという、憲法解釈説である。

² 沖縄の知識人である大田朝敷の言。

³ このような見解が成り立つことは十分に考えられるが、死者の尊厳は等しく尊重されるべきである。とはいえ、死者の尊厳と死者のポジショナリティ、すなわち死者の歴史的・政治的文脈の相違は両立する概念であると考え。死者がどのような歴史的・政治的ポジショナリティにおいて死者となったのかは、個別に慎重にかつ精緻に考えられるべき問題である。沖縄戦の死者と原爆の死者のポジショナリティの違いを考えることは、決してどちらかの尊厳を貶めることには繋がらない。沖縄戦であれ原爆であれ、非人道的行為の帰結としてうみ出された死は、それぞれの行為の“非人道性”の責任を追及するものである。沖縄戦における米軍の攻撃や日本軍の行為の非人道性、原爆投下における米軍の非人道性は、それぞれの歴史的・政治的文脈においてその責任を追及されるべきである。むしろそれらの死を一様に「国民国家間の戦争における犠牲」として認識することこそ、そ

⁴ 1995年に“平和の礎”が沖縄に作られ、ここでは戦争の死者は敵味方の区別なく名を刻まれているが、それ以前には佐木が指摘する状況が続いていた。しかも“平和の礎”は沖縄県の主導で作られたものであり、日本人がこのような思想を積極的に沖縄戦戦没者慰霊に際して示したわけではない。なお、この“平和の礎”については、本稿での論点とは別に、その日本人における受容態度において様々な問題点が存するが、本稿とは文脈が異なるため別稿に譲りたい。

⁵ この2つの表象の違いは、ひめゆりに沖縄戦の被害を表象させることによって、同時に沖縄人と沖縄戦の被害者を女性化するという、ジェンダー化の契機もはらんでおり、サイドが指摘するオリエンタリズムの特徴を十分に備えてもいる。

⁶ “フォーディズム”という用語は、いうまでもなくヘンリー・フォードが完成させた大量生産システムから名づけられている。しかしながら“フォーディズム”という語によって指し示される発想自体は、フォードが活躍する以前の国民国家勃興期、すなわち産業革命後から一貫して存在している（Taylor Systemという語で呼ばれたこともあった）。フォードはその流れの完成者として位置づけられるべきと考える。すなわちフォード以前から“フォーディズム”は存在しており、本稿では便宜上“フォーディズム”と用語を統一したい。

⁷ このメンミによる定義については、詳細が野村（2003）において論じられている。

⁸ この点について、メンミ自身も指摘しており

(Menmi, 1994=1996:207), また野村 (2003:133本文および註3) においても詳しく論じられている。

- ⁹ この仮の定義は、メンミによる差別の定義と近似している。筆者はメンミの示した差別についての包括的な視点を、心的傾向という側面に特化して論じることによって、制度論や歴史認識という枠組みのみでは捉えることのできない、さまざまな次元における植民地主義の痕跡を捉えたいと考え、このような仮の定義を行った。それはメンミの思考を、日常生活におけるポリティックスに適用するという意図も含んでいる。
- ¹⁰ このような土地に結び付けられた支配の認識は、地政学という植民地支配を正当化する言説と容易に結びつく。沖縄の米軍基地の存在を地政学によって正当化することは、実際には“地政”などとはほとんど関係のない、無関心によって引き起こされる心性の表出である。沖縄の米軍基地の存在を地政学によって正当化する視点への批判は、池田 (2003a:43-45) を参照されたい。
- ¹¹ この無意識であることによって可能になる植民地主義の諸相については、野村浩也が克明な分析を行っている。紙幅の関係からここでその詳細には触れないが、「心性としての植民地主義」を考える際にきわめて示唆に富んでいる (野村, 2005)。
- ¹² 同様に、被支配者もまたその状況を説明する言葉を、当初はもてない。“第三世界”において、詩人や文学者が社会的に大きな尊敬を集めているのはこのことと無縁ではない。マリオ・バルガス＝リョサやガルシア・マルケスといった文学者の社会に対する影響力の大きさは、“第一世界”では考えられないものである。“第三世界”の住人は、固有の言語を奪われ、植民者の言語しか持ち合わせていない場合も多い。しかし植民者の言語は、支配する者の言語であり、支配されている状況を説明する言説は存在していないし、支配を説明する言説も先に述べたように存在してい

ない。その言説の空白を、支配者の言語を使って、組み換え、表現したのが文学者である。彼らは初めて状況を言語化したゆえに、信頼と尊敬を集めていると考えられる。

- ¹³ このようなスポーツを基準として男女の体力差を本質化する言説に対しては、伊藤公雄が詳細にその虚構性を論じているので参照されたい (伊藤, 2003:217-223)。
- ¹⁴ このような脳差論のもつ奇妙さと無根拠性については、池田 (2004:10-11), 江原 (2002:82-88) などを参照されたい。
- ¹⁵ この点について、渋谷望は社会における悪意 (たとえばヘイト・ポリティックス) がどのように根拠づけられ、正当化されうるかを「幻想」という概念を用いて論じている (渋谷, 2004)。
- ¹⁶ このような命名における責任転嫁にかんして、とくに「沖縄問題」における政治的効果については、田仲 (1999), 野村 (2002), 池田 (2003a:40-41) を参照されたい。
- ¹⁷ 野村浩也は、この逆転現象を「加害者の被害者化と被害者の加害者化」と表現している (野村, 2005:108)。
- ¹⁸ 土本典昭監督のドキュメンタリー映画『水俣一揆：一生を問う人々』(1973年, 青林舎製作) には、この1年3ヵ月後の交渉の様子が記録されており、緊迫した様子を知る一助となるだろう。
- ¹⁹ 「こんな病人」とは、側のソファに横たわっている島田社長を指す。
- ²⁰ もちろんそのような瞬間を感じることは、筆者自身の感受性の問題である可能性は排除できない。しかし、そうであるならなおさらのこと、コロニアリストの感性における、このような変換 (逆転) の可能性 (それが100%コロニアリストの責任であるゆえに) を強調しておくことは必要であると思われる。
- ²¹ このような“沖縄好き”のことを“沖縄病”と呼ぶことがあるが、野村浩也はこのような存在を、差別を隠蔽する略奪者であり、その犯罪性を明示するために“沖縄ストーカー”

と再命名している（野村，2005：171）。また，同書には彼ら／彼女らがいかに傍若無人で“沖縄人の場”を破壊するかの事例も紹介されている（野村，2005：175註128）。

²² モデル・マイノリティについては池田（2003b：22-25），野村（2005：236-245）などを参照されたい。また植民地主義における共犯化については野村（2005：第2章；第3章）において詳細な分析が行われているので参照されたい。

²³ この多田の態度は，たとえば「私は，沖縄を正面から議論できない植民地主義の記述を，受け入れるわけにはいけない。また，植民地主義を問題化できない沖縄研究も，拒否しなければならないと思う」と宣言する富山一郎の姿勢とは対照的である（富山，2002：5）。

²⁴ ちなみに富山一郎は，けっして土地や歴史，あるいは既存の学問スキームと植民地主義の相関を否定しているのではない。むしろそのような見方によって隠蔽される支配のありようを問題化しているのである。

²⁵ このような，被支配者の多様性を賞賛することによってコロニアリストがえられる利益の構造については，池田（2003a：42-43）を参照されたい。

²⁶ “イタイタイ病”は産後の女性に多く発症した。

²⁷ ここに記載した引用は，筆者による抜粋である。

²⁸ このエピソードは，“TV Nation Volume One”（Columbia / Tristar Studios - ASIN：0800199103）に収録されている（米国版）。

²⁹ このエピソードは，『マイケル・ムーアの“恐るべき”真実 アホでマヌケなアメリカ白人 第3巻』（アット・エンタテインメント-ASIN：B0000A1XOG）に収録されている（日本版）。また，対等性については別稿「平等，寛容，想像力，そして植民地主義 - 植民地主義をめぐる基礎的考察II -」を参照されたい。

³⁰ もっとも，「マヌケ」「カッコ悪い」ことが権力と富の帰結であるという文脈に逆変換されて，「マヌケ」さや「カッコ悪」さに価値を付与する考え方もありうるため，このような語法の抑止効果は十分ではない可能性もある。とくに「カッコ悪さ」については，たとえば「そのカッコ悪さが人間的だ」といった倒錯したヒロイズムを身につけることによって，富と権力を保持するための自己欺瞞が成立する余地は，多分に存在するだろう。しかしながら，少なくとも男性にかんしては，自他共に自身を「マヌケ」と認識している状況は，男性が過ごしてきたジェンダー世界の価値観からみて，かなり抵抗感の高い事態であり，一定の抑止効果は期待できるのではないだろうか。

参考文献一覧

- Armstrong, Karen 1986 *The Gospel According to Woman: Christianity's Creation of the Sex War in the West*, (高尾利数訳1996『キリスト教とセックス戦争 - 西洋における女性観念の構造』柏書房)
- 江原由美子 2002『自己決定権とジェンダー』岩波書店
- 池田緑 2003a 「「沖縄問題」の言説構造と日本人の位置性」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要 - 社会情報系 -）』12：39-57
- 池田緑 2003b 「男性言説をめぐるポリティックス」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要 - 社会情報系 -）』12：17-38
- 池田緑 2004 「“男女共同参画”とその社会的言説 - 産業社会と寛容さをめぐって -」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要 - 社会情報系 -）』13：9-23
- 石牟礼道子編 1974『天の病む - 実録水俣病闘争』葦書房
- 伊藤公雄 2003 『「男女共同参画」が問いかけるもの - 現代日本社会とジェンダー・ポリティックス』インパクト出版会

- 鎌田慧 1991 『ドキュメント隠された公害』ちくま文庫
- Menmi, Albert 1994 *La Racisme*, (菊地昌美・白井成雄訳 1996 『人種差別』法政大学出版会)
- Moore, Michael 2001 *Stupid White Men*, (松田和也訳 2002 『アホでマヌケなアメリカ白人』柏書房)
- 野村浩也 2002 「『希望』と観光にみる無意識のテロリズム」『インパクション』132:166-177
- 野村浩也 2003 「差別理論」中根光敏+野村浩也+河口和也+狩谷あゆみ『社会学に正解はない』松籟社:131-161
- 野村浩也 2005 『無意識の植民地主義—日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房
- 小倉千加子 2001 『セクシュアリティの心理学』有斐閣選書
- Said, Edward.W 1978 *Orientalism*, (板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳1993 『オリエンタリズム』平凡社(上・下))
- 佐木隆三 1982 『わが沖縄ノート』潮出版社
- 渋谷望 2004 「悪意はどう組織化されるか」『インパクション』143:38-43

- 多田治 2004 「再び沖縄へ—今後のカルチュラル・タイフーンにむけて」岩淵功一・多田治・田仲康博編『沖縄に立ちすくむ』せりか書房:190-197
- 高橋哲哉・斎藤貴男 2004 『平和と平等をあきらめない』晶文社
- 田仲康博 1999 「『沖縄問題』と『沖縄の問題』」状況出版編集部編『沖縄を読む』状況出版社:198-203
- 富山一郎 2002 『暴力の予感—伊波普猷における危機の問題』岩波書店
- 富山一郎 2005 「平等ということ」『インパクション』147:172-175

付記:

本稿の内容は、インターネットを利用した沖縄関連研究者のネットワーク「ゆんたくML」における議論から非常に多くのものをえている。本稿で論じたような考察の可能性自体、「ゆんたくML」の存在なしにはありえなかつただろう。「ゆんたくML」において重要かつ忘れられない多くのものを与えてくれたメンバー諸氏に、遅ればせながら感謝の意を表したい。

Colonialism as a Mind Tendency **: Basic Consideration to Colonialism. Part I**

IKEDA MIDORI

School of Social Information Studies

Abstract

So far, colonialism has been discussed mainly in the political system and history. But with that kind of recognition framework, the colonialism which continues today cannot be discussed effectively. Simultaneously, things related to colonialism which are omnipresent in this society cannot be recognized. Colonialism is not the system and the historical problem, I would like to redefine it as problem of mind tendency. It has become possible to discover the trace of colonialism, in the relationship of domination which is omnipresent in this society. Furthermore, it has also become possible to describe to the responsibility of colonial relationships as a problem of the mind of colonialists.

The technique for dominating the colonialist is quite common and can be discovered in this process. That is, the missing discourse which indicates the relationship of domination, distinction, shift of problem to the suffering dominated person, intervention to dividing dominated persons, and praise of diversity of the dominated persons which compels them to accept self deception, and so on. When these techniques are observed carefully, we can discover the trace of colonialism in relationships of the domination which is institutionalized. And that makes it possible to recognize the problem of system as one of the heart.

Key Words (キーワード)

“Colonialism” (植民地主義), “Mind Tendency” (心的傾向), “Nation-State” (国民国家), “Foedism” (フォーディズム), “Social Class” (社会階層), “Okinawa” (沖縄), “Minamata Disease” (水俣病), “Gender Politics” (ジェンダー・ポリティクス)